

## 懐かしい青春物語を再考する —読書と人生経験—

長岡 壽男\*

大阪青山学園理事

Dear youth stories are reconsidered  
-Reading and life experiences-

Hisao NAGAOKA

Osaka Aoyama Gakuen

**Summary** People read many books from their childhood. These books include comic books, magazines, fairy-tale stories, and biographies for children. Especially, during the springtime of life, they read so-called youthful stories and get reminded of these stories as dear memories after they become adults.

In this paper, the author takes up ten famous works of youthful stories and classifies them into five categories based on their plots. He recollects his first impressions he received when he first read them and makes his present remarks about them as he reads them today. In conclusion, the first impressions of each work stay unforgettable until now.

As he gains life experiences, he becomes aware of new discoveries and events related to these works. In other words, there could later be life events closely connected to the authors and their works he continues reading. He thinks that this point is most important as a piece of his meaningful advice to young people who read books.

### 1 はじめに

大人になってから以前に読んだことのある書物について思い出し、改めて新たな想いを抱くことはないだろうか。書物には文学作品だけでなく、子ども向きの雑誌、漫画やスポーツ誌なども含まれる。伝記物語のように、子どもの頃、親から買ってもらったものや学校で先生から推薦された文献とか、友達が読んでいて感化を受けた作品もあれば、大学受験の必読書とされた作品もあった。このように、読書経験は人それぞれ、実に多様であるといえるが、今、改めて想うことは、人は様々な読書経験により生涯に渡って多くを学び、また、時を経て読み直すことから、再び自己を振り返り、新たに学び直すことに繋がるというものである。したがって、懐かしく思い出される作品が多数にのぼることは、学びの実践としても貴重であろう。

本稿は、筆者がかつて読んだ書物の中で、いまでも懐か

しく思い出される青春物語を取り上げて整理し、改めて再考するものである。ここで述べる青春物語とは、厳密な定義を設定するのではなく、若い主人公が、ひたむきに生きる姿を捉えた物語や、生活、学業、スポーツ、恋などに精いっぱい取り組む様子を表現している作品を対象にしている。取り上げた作品について、読者周知のストーリーを前提に、筆者が現在、読み返す中で、以前とは異なる解釈、感想等、比較分析を試みるものである。中には、かつては特別に意識していなかったものの、尊敬していた作者のその後の生き方に疑問を持つ事例も出てきた。しかし、当該作者の作品の文学的評価を引き下げるつもりは全くない。是非、若い人々にもこのような文学作品を幅広く読んでいただきたいと思う次第である。

本稿の構成は、“2 本稿で取り上げる青春物語の作者と作品”にて事例とする作品について簡単に紹介し、“3 作品の思い出とその後”で筆者がこれらの作

---

\*Email: hisao@sakura.zaq.jp  
〒562-0046 箕面市桜ヶ丘2-6-3

品を初めて手にした際と現在における解釈について、比較分析を試みる。“4 作品についての考察”では、取り上げた作品全体を考察する。最後に、まとめとして筆者の考えを述べる。

## 2 本稿で取り上げる青春物語の作者と作品

印象に残った作品といっても、人それぞれに多々あると思われるが、なかでも子どものころや受験生時代、そして学生時代に読んだ青春物語を中心に、以下の 10 作品を取り上げてみた。作品が伝えている内容から、5 分類して、下表（表 1）のように整理している。

1) 若者の淡い想いを伝える作品として、樋口一葉の『たけくらべ』、川端康成の『伊豆の踊子』を選んだ。2) 純粋な若者の恋物語として、三島由紀夫の『潮騒』を取り上げた。3) 若者の失恋を描いた作品として、森鷗

外の『舞姫』、伊藤左千夫の『野菊の墓』、武者小路実篤の『友情』を入れた。4) 純粋な若者の生き方を伝える作品として、夏目漱石の『坊っちゃん』、山本周五郎の『ちいさこべ』、井上靖の『あすなる物語』を取り上げている。5) 子どもたちの成長と戦争の悲劇を伝える作品には、壺井栄の『二十四の瞳』を入れた。

なお、作者によっては複数の作品を発表しており多くの支持を得ている例がある。例えば、武者小路実篤の『愛と死』、『若き日の思い出』も有名であるが、ここでは『友情』を取り上げる。井上靖においては、複数の自伝的青春小説を書いているが、本稿では『あすなる物語』を取り上げる。また、山本周五郎の『ちいさこべ』は短編ではあるが、少年少女によく読まれている作品であり、他の有名作品を差し置いて取り上げてみた。これらの作品は、いずれも当該作者の代表作のひとつでもあり、現在においても多くの若者に読まれている。作表にあたり、同一作者の他の有名作品を併せて記している。

表 1. 本稿で取り上げた作者と作品の一覧

作者	作品	発表年	他の主な作品
1) 若者の淡い想いを伝える作品			
樋口一葉	たけくらべ	M28	うもれ木、にぎりえ、十三夜
川端康成	伊豆の踊子	T15(S1)	浅草紅団、雪国、山の音、古都
2) 純粋な若者の恋物語			
三島由紀夫	潮騒	S29	仮面の告白、金閣寺、春の雪
3) 若者の失恋を描いた作品			
森鷗外	舞姫	M23	阿部一族、山椒大夫、高瀬舟
伊藤左千夫	野菊の墓	M39	浜菊、隣の嫁、春の潮
武者小路実篤	友情	T8	愛と死、若き日の思い出、真理先生
4) 純粋な若者の生き方を伝える作品			
夏目漱石	坊っちゃん	M39	三四郎、吾輩は猫である、草枕
山本周五郎	ちいさこべ	S32	青べか物語、柳橋物語、樅の木は残った
井上靖	あすなる物語	S33	しろばんば、夏草冬濤、北の海
5) 子どもたちの成長と戦争の悲劇を伝える作品			
壺井栄	二十四の瞳	S27	母のない子と子のない母と、柿の木のある家

注：M は明治、T は大正、S は昭和の略。

なお、上述の作家並びに作品に関係する場所などについては、その作品の舞台やゆかりのある場所を訪れて、執筆の参考にした（表 1 の作家順に以下に記している）。訪問先に＊印を付けているのは、平成 28 年中に訪れたところである。

樋口一葉については、「桜木の宿」跡地、法眞寺（赤門前）、台東区立一葉記念館をそれぞれ訪れた＊。川端

康成については、茨木市にある祖父の家の旧跡を尋ねている＊。三島由紀夫については、奈良にある円照寺を尋ねた＊。森鷗外は、千駄木の森鷗外記念館を訪問した＊。伊藤左千夫については、山武市歴史民俗資料館と生家を訪ねた＊。また、『野菊の墓』の舞台となった、矢切りの渡しから堤防越えの風景を見渡したこともある。武者小路実篤は、調布市の仙川にある武者小路実



篤記念館と実篤公園を訪問した。夏目漱石は、千駄木にある旧宅跡と三四郎池を訪れた\*。山本周五郎については「青葉の笛」を寺宝とする須磨寺に記念碑があり訪問している\*。井上靖に関しては、三島市クレマチスの丘にある井上靖文学館を訪問した\*。壺井栄については、香川県小豆島を訪れ、苗羽尋常小学校田浦分校跡地(岬の分教場)や二十四の瞳映画村にある壺井栄文学館を訪れた\*。

### 3 作品の思い出とその後

#### 3-1. 若者の淡い思いを伝える作品

##### 3-1-1. 樋口一葉『たけくらべ』

樋口一葉(1872年~1896年)の生涯は、貧困との戦いに明け暮れたといえる。下級官吏であった父が副業を始めたことが破産につながり、長女であった一葉が家族の面倒を見ることになった。上級学校に進みなかったが、叶うことなく尋常小学校(高等科)卒業後、独学で文学にいそしみ、次々に作品を発表していたことになる。その間の生活は苦しく、駄菓子屋を開くなど苦労は絶えなかった。現在の東京都内を転々と住居を変えているが、まだ余裕のあった頃は、東京大学赤門の対面にある法真寺(写真1参照)隣に住居があった。



写真1. 修復工事中の法真寺(傍に一葉の家があった)

この頃は、父も健在であり、生活に余裕があったことから、楽しい日々を過ごしていた。法真寺の配布資料には、『たけくらべ』の主人公の一人信如は、子どもの頃、一葉がこの寺の若僧と遊んでいたことから、この僧をモデルにしたとされると記している。また、一葉は、この家を「桜木の宿」と呼んでいたことも伝えている<sup>(1)</sup>。なお、台東区には、現在一葉記念館があり、一葉を記念する物が公開されている。この入口近くに一葉を讃える、菊池寛撰、小島政二郎書の顕彰碑が置かれている(写真2参照)。

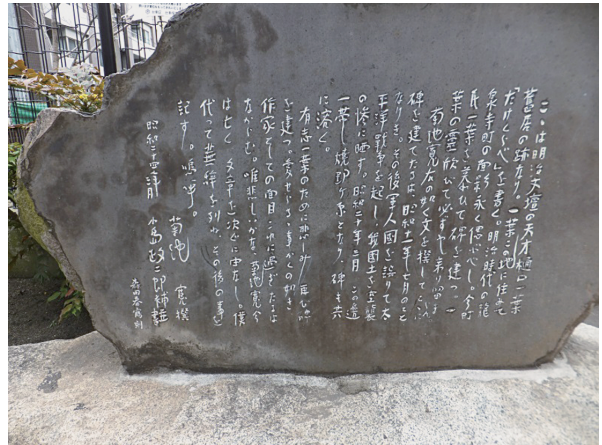


写真2. 樋口一葉を讃える顕彰碑

作品の中で評判の高かった『たけくらべ』は、近隣ではあるが住所地域が異なる子どもたちの張合いがテーマとなっている。一方のグループの参謀格であった寺の信如と、相対するグループの美登利との淡い思いが作品の中で描かれている。ある日、信如が修行のため寺を出ていくことになるが、その日の朝、美登利の家に水仙の花が届けられていた。幼馴染みの少年と少女の淡い恋心を、小説に取り上げた作品は、これまでの日本にはなく、一葉の名を不朽のものにしたといえる。

一葉は、肺結核を病み24歳(1896年)の若さで死亡したが、これも貧困の結果、栄養失調が原因と思われる。家計のやりくりで、借家を幾度も変えていた。親が進めていた縁談も家運が傾くと、たちまち破談になっている。一時、半井桃水<sup>(2)</sup>との恋も噂されたが、実ることなく終焉した。このことについて、一葉は日記などに詳しく記している<sup>(3)</sup>。若くして亡くなったことについて、上田敏、森鷗外、幸田露伴など多くの文学者たちは、その死を惜しんだ。

また、大杉栄<sup>(4)</sup>などを虐殺したとされる甘粕正彦(満州映画協会理事長)は、樋口一葉の生き方や作品を評価しており、評論を残している<sup>(5)</sup>。右翼思想の持ち主であり、満州帝国の実現に暗躍した人物が、樋口一葉を尊敬していたことは意外に思われる。このなかで、一葉のことを、「文学に対する真剣さ、生活に対する真面目さ、女性とは思えない覚悟の立派さ、人生の道を求めたる者の崇高な姿として限りなく愛する」と記している。甘粕正彦は、「忠君愛国」のためには、テロも非合法的な謀略も辞さない思想と行動によって、当初から日本のファシズム運動とともに歩んできたが、その崩壊とともに自殺している。甘粕はまさしく典型的なファシストのひとりであったといえる<sup>(6)</sup>。

一葉と甘粕とは、世間における生き方は全く異なる

が、一葉のぶれることのない生きざまに、甘粕の心を捉えるものがあつたと解される。

一葉の生きた時代は、旧来のジェンダーにかかる問題を抱えており、女子教育の重要性が、ようやく唱えられるようになってきた頃である。良妻賢母といった捉え方も、この時代からの教育思想であつた。一葉個人の生活には、当時のジェンダー問題と、家庭における経済問題という、言わば二重の枷が掛かっていたことになる。しかし、こうした制約や障害にもかかわらず、自己実現に苦闘した姿に、誰もが賞賛し評価するところである。

### 3-1-2. 川端康成『伊豆の踊り子』

川端康成は（1899年～1972年）、1968年にノーベル文学賞を受賞。『伊豆の踊り子』は作者の代表作であり、多くの読者ファンがいる。小説では、旧制一高生が、伊豆を旅行中に、旅役者一行と道ずれになり、旅を続けることになる。旅のなかで、高校生と若い踊り子とが、ほのかな思いをお互いが寄せ合うところに、読者の琴線に触れることとなった。ただし、エリート高校生と、旅役者の踊り子では、所詮つり合わないことを、世事にたけた周りの大人たちは察知している。また、作品の中で旅役者について、旅館の女将の言葉などにより、いかなる人物であるかを暗に表現している<sup>(7)</sup>。ストーリーだけを追っていると、このことを見失いがちになるが、物語の顛末を暗示しているかと思われる。踊り子の兄貴が悪い病の腫物に悩んでおり、兄嫁も同じ病による悩みを抱えていた。旅の中で生まれた子どもがほどなく死ぬのは、このことが原因と推測している<sup>(8)</sup>。こうした悲惨な現実や彼らの生きざまについては、作品の中では具体的な表現を避けている。したがって、物語の中で純情な二人の若者の行く末について、読者の関心を煽ることから、感動を生むことにもつながったといえよう。

『伊豆の踊り子』は、これまでに何回か映画化されており、踊り子には田中絹代、美空ひばり、鰐淵晴子、内藤洋子、山口百恵が演じてきた。

ところで、川端康成は、医師の家に生まれたが、幼少期（3歳）に両親を亡くしており、大阪府三島郡豊川村（現茨木市宿久庄）にいた祖父に引き取られた（写真3参照）。また、姉は別の親戚に預けられた。川端康成は、豊川小学校から茨木中学に進学したが、中学在学中にこの祖父も亡くなり、母親の親せき筋や地縁の知人の支援を得て、旧制一高、東京帝国大学文学部へと進学している。秀才ではあつたが家庭環境には、恵まれなかつ



写真3. 川端康成祖父の家跡

たことを本人も人間形成面における問題点として認識していたかと思われる。『伊豆の踊り子』においても、主人公が「二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでいる

と厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に耐えきれないで伊豆の旅に出てきている」と書いている<sup>(9)</sup>。まさしく作者自身のことであろう。こうした育ちが一つの因となって、伊藤初代（カフェ・エランにいた娘）との恋愛事件とも関係していたのではなかろうか<sup>(10)</sup>。なお、結婚を前提に、伊藤初代や親のところを訪れているが、これらの費用を、後見人のところに何回か費用借用の便りを出している<sup>(11)</sup>。しかし、約束までしたにもかかわらず、初代に逃げられてこの恋は実らなかった。なぜ、この恋は実らなかったのか追跡していた研究者の記録が、最近記事として発表されている<sup>(12)</sup>。

なお、川端の祖父と、政治運動家であつた笹川良一の父とは、囲碁の仲間で、両家をお互いに行き来しており、豊川小学校の同級生であつた川端と笹川も自然に仲良くなった。二人は性格も生き方も異なるが、終生付き合いが続いた。川端康成が先祖の墓を鎌倉に移すまで、数十年間、笹川が地元にあつた墓を守つたことは有名である<sup>(13)</sup>。笹川については、日本の首領とも政財界の黒幕とも呼ばれるなど、人によって見方がそれぞれ異なる<sup>(14)</sup>。たとえば、笹川が会長を務めた大阪でのモーターボート競走会総会で、出席していたオブザーバーにも気を使い、閉会後の昼食に「鍋焼きうどん」、フルーツには「夏ミカン」を出させている。これは、出席した所管の役人や金融機関担当者が、気兼ねなく食事できるように、同氏が心配りした所作であつた<sup>(15)</sup>。しかし、一方では、東京での接待は、「チャーハン」ばかりであつたといわれており、基本的には食事に質素であつたことになる<sup>(16)</sup>。なお、笹川は八十数歳になつても、エレベーターは使用しないほど健康であつた。また、「歳は勝手にとるものであるから、



個人で勝手に捨てても問題ない。わたしは、60歳を捨てている」と老人たちへの慰労会会場で、主催者としての挨拶のなかで話している。会場にいた高齢者を成程と唸らせていた。

川端康成が会長として、昭和32年国際ペンクラブの大会を日本で開催したが、笹川が資金面での支援をしたとのことである<sup>(17)</sup>。閉会后、外国から来た人たちを、京都の野村別邸に招くなど、大会は成功裏に終始した<sup>(18)</sup>。このあと、川端はノーベル文学賞を受賞するなど、頂点を極めたが、後に睡眠薬の多用により、命を絶ったことは誠に残念であった。

### 3-2. 純粋な若者の恋物語

#### 3-2-1. 三島由紀夫『潮騒』

三島由紀夫（1925年～1970年）は、本名平岡公威、父元農林省水産局長の平岡梓と母倭文重の長男として生まれた。祖父定太郎も元樺太庁長官を務めており、本人を含めて三代続けて、東京帝国大学法学部の出身で、官僚エリートの家系であった。

幼少のころ、父母がいるにもかかわらず、祖母の溺愛を受けており、祖母のもとで過ごしている。近所のガキ大将達と取組み合いをしたり、ふざけたり、みんなで野球をしたりする経験がなく、部屋の中で文学書を読むという生活であった。中等学校時代には、文学雑誌に作品を発表するようになり、三島由紀夫のペンネームを使用するようになっていく。学習院中等科では、2番で卒業したが、さらに高等科では主席で卒業し、陛下より銀時計を拝受している。まさしく秀才かつ優等生であった。東京大学法学部を経て、大蔵省銀行局に勤務したが、創作活動に専念するため、9か月で同省を退職している。

三島由紀夫の多くの作品の中では、『潮騒』は数少ない青春小説であり、多数の読者がある。研究者の指摘にあるように古代ギリシャの物語『ダフニスとクロエ』を題材として、現代に置き換えて描かれたものが『潮騒』とされる<sup>(19)</sup>。若い恋人同士が、いくつかの障害や不運に見舞われながら、これらの障害を乗り越えて、めでたく結婚に至る物語である。他の作品にはみられない、読みやすく素直な青春物語といえよう。

なお、後年に読んだ『豊饒の海』四部作のうち『春の雪』は、印象に残った作品である。若い華族同士の恋愛を取り上げているが、華族の生活ぶりを描くことのできるのには三島由紀夫だと思われる。もともと仲の良かった二人が、何かの行き違いから疎遠になっていた。女性側に宮家との縁談がまとまった時から、男性

側から「より」を戻そうとする動きとなった。道ならぬ関係に陥り、女性は出家して、門跡寺<sup>(20)</sup>である月修寺（奈良市にある円照寺がモデルとされ、通称は山村御殿である）に逃げ込むことになる。恋人を追ってきた男は、門前で入寺を断られる（写真4参照）。



写真4. 円照寺正面付近

この時の春の雪が降る寒さがもとで、男は肺炎をこじらせて病死するという顛末である。この寺は許可を得なければ入れない処であり、特別な寺であることに着目する必要がある。学習院育ちであること、華族の生活やたち振る舞いに慣れていることが、こうした小説を書き得るものと考えられる。

ここで取り上げるテーマではないが、三島の作品には、難解であるとか、読者にとって理解に苦しむ作品もある。たとえば、『仮面の告白』での幼少期の行動と思ひなどは、頭の構造が違うと理解するのか、不可解と思うのか、人によってとらえ方が異なると思う。これは、幼少のころの、無駄な遊びや子ども仲間との付き合いの無さが、成長後の人生や性格形成に影響があったのではないかと考えてしまう。成人してから、ボディビルに励むとか、ボクシングや剣道で肉体訓練に努めるなどは、自らのコンプレックスを補うことにあったのではないだろうか。

次々に作品を発表するなかで、ノーベル文学賞候補としても名が挙がるようになっていたが、一方において右寄りの思想のもとに「楯の会」を立ち上げている。大学在学中に徴兵検査で不合格になり、親とともに喜んでいた若者が、平和な時代になって、疑似軍隊を私費で組成していることは、一般人には理解に苦しむ所である。市ヶ谷の自衛隊駐屯地において総監を人質にとり、自衛隊員を前にしてアジ演説を行ったうえで、決起を促すも失敗し、割腹自殺している。隊員達が自分の考えに納得すると思っていたとすれば、やはり異

常な精神状態になっていたとしか思えない。弟の千之は、三島の政治への関りが、何よりもゲーム遊びのようだったといっている。子どもの頃にさせてもらえなかった戦争ごっこをしていただけだとしている<sup>(21)</sup>。

しかし、『潮騒』という作品は、作者の晩年の行動とは全く及びもつかないものであり、青春物語の誉れ高いものとして、永久に読み継がれるものと思われる。

### 3-3. 若者の失恋を描いた作品

#### 3-3-1. 森鷗外『舞姫』

森鷗外（1862年～1922年）は、本名林太郎、父静男、母峰子の長男として生まれる。森家は津和野藩に仕える典医であった。その影響もあり、医学の道を志し、現在の東京大学医学部の前身に入学、19歳で同学部を卒業している。陸軍軍医として勤めるが、ドイツ留学を命じられ衛生学を学ぶことになる。軍医として官位を極めた人であり医学博士となるが、一方、多くの文芸作品を発表して、後に文学博士をも受けている。社会的にも文学の世界でも名声をほしいままにした人であったが、鷗外の女性遍歴や家庭生活は幸福ではなかったと吉野俊彦（1994）は断じている<sup>(22)</sup>。

鷗外は、ドイツから帰国後、1889年西周の媒酌で、海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚したが、翌年長男於菟が誕生するも、この子を森家が引き取り登志子と離婚している。このころ発表した短編の『舞姫』が、本人の留学時代の恋愛との関係において、しばしば詮索されることになった。小説の中の主人公二人が、作者とその恋人と誤解されるところがあり話題となったものである。とくに、ドイツから鷗外を追いかけたエリーゼ（小説『舞姫』の女性名は、エリスである）は、結局、鷗外の兄弟や親せき筋の説得により、森家の費用負担の上、一ヵ月後追い返されている。このあたりの鷗外自身の行動および考えについては、非情の人、出世のためには恋そのものを否定する人間であると、人々にみなされる因となった。なお、エリーゼが帰国して4ヵ月後、鷗外は結婚したことになる<sup>(23)</sup>。

このエリーゼについて、かねてより多くの人々の研究対象になっていたが、最近、六草いちか（2011）、（2013）により、エリーゼという人物を探し求めた研究成果が、明らかにされている。本人の子孫を探し出し、エリーゼの写真も公開している。悲劇的な別れになった二人について、ここで感想を述べる筋合いはないが、一人の女性をこのような形で、恋の顛末をつけたことが、多くの日本人にとって、彼女に対する同情の気持ちを抱かせた事になる。鷗外の気持ちを察する

と、陸軍、親せきなどのしがらみを考える場合、異国の女性との結婚は、当時としては厳しい現実があったことになる。エリーゼを送り返した直後に、縁談が持ち込まれて結婚したが、このあたりの気持ちがお互いにしっくりしたものとはならず、一年後の離婚となったとも解される。『舞姫』という小説が、実在の人間の生きざまとの関連で話題をまいたが、このことを含めて、鷗外の女性関係を調べた先述の吉野俊彦（1994）がある。ただし、本稿の目的ではないので、これ以上詳述は避けたい。

なお、鷗外は1902年に判事荒木博臣の長女志げと再婚している。志げも最初の結婚で、遊び人の夫の新聞種にいや気がさし、二十日あまりで離婚した経験があった。一方、鷗外は、独身十一年目に、再婚したことになる。なお、晩年住んだ千駄木の家跡に、現在、森鷗外記念館がある（写真5参照）。



写真5. 森鷗外記念館入り口

この再婚により、三人の娘を授かっているが、長女の森茉莉が、父鷗外について書いたエッセイ『父の帽子』がある。よき父であったことが綴られており、上記吉野俊彦（1994）からは、考えられない作品である。

鷗外の軍医としての業績は、順調に推移したが、軍医総監時代に、脚気をいかに封じるか、海軍との間で議論が持ち出された。海軍の軍医総監高木兼弘<sup>(24)</sup>は、兵に対して、麦飯、パンのほか肉・野菜を供することで発病防止に繋がった旨、実証的に証明した。しかし、学究的に証明されていない理由で、陸軍ではこの意見を取り上げることはなかった。このため、陸軍において脚気患者が続出し、深刻な事態になった。これは、理論的証明を重視するドイツ医学と、実証研究を重視するイギリス医学との対立でもあり、陸軍（森）と海軍（高木）との面子をかけた対立でもあった。脚気が病的に証明できたのは、ビタミンの発見を待たねばならなかったが、明らかになった時点では、この二人



は世に無かったことになる<sup>(25)</sup>。偉大な人たちの行動の中にも、「そうだったのか」という事実がある。

上記のように、脚気についての議論には、学閥の対立、陸軍と海軍の意地、総監同志の面子などが、絡んでいたと思われる。しかし、陸軍に深刻な影響が出ている限り、兵隊の立場に立って、兵隊の目線で問題の解決に努めるべきであったと思われる。

### 3-3-2. 伊藤左千夫『野菊の墓』

伊藤左千夫は(1864年～1913年)本名幸次郎。22歳のとき上京し、明治法律学校(現明治大学)に学ぶ。しかし、眼病を患い失意のうちに退学し、その後搾乳業を営んでいる。正岡子規の門に入り、俳句のほか和歌や小説に取り組んだ。代表作『野菊の墓』は、清純な恋物語として、今でも多くの愛読者がいる。

『野菊の墓』では、農村での生活ぶりをさわやかに描いているが、親類の縁にあたる従姉で二歳年上の民子が、仕事の手伝いや母の看護のために、我が家に来ていた。親しくはなっても、政夫とは、当時の風習からみても、愛し合うことはもちろん、一緒になることなど、考えられない時代といえた。民子は、中学に進んだ政夫のことが忘れられないまま、親の勧めで他人に嫁ぐことになった。嫁いだ民子には、良いことがなく政夫への想いが募るばかりで、やがて病を得て里に帰されることになった。映画の中では、民子が病を癒えて、嫁ぎ先に早く帰れることを願う年寄りの言葉を、政夫の兄が「みんな民子の気持ちをひとつも分かってはいない」と嘆き、遮るシーンが観客を泣かせる場面となった。政夫の兄は、民子が嫁ぎ先ではいいことがなく、政夫のことばかり考えており、療養するなら政夫の住む近くでという願いがあったことを感じ取っていた。民子は最期まで、政夫の写真と手紙を手元に離さず所有していた。

なお、何回も映画化されているが、「野菊の如き君なりき」の主演には、有田紀子―田中晋二、安田道代―太田博之によるものがあり、「野菊の墓」としては、山口百恵―三浦友和、松田聖子―桑原正のコンビによるものがある。

伊藤左千夫は、田舎育ちで人情味があり、情熱的、感傷的かつおおらかであったと評されているが<sup>(26)</sup>、このことは上総の国の成東(現千葉県山武市)の生まれからも想像できる。なお、初期の歌には、

「牛飼が 歌よむ時に世のなかの 新しき歌大いにおこる」

があり、人々に知られている。子規の没後、歌の弟子に対する師匠役を務めたが、この門人には、斎藤茂吉、島木赤彦、中村憲吉、土屋文明、石原純などが有名である。過日、成東(山武市)にある左千夫の生家を訪れたが、いまなお田園風景の残る一帯のなかにあり、当時の農家としては豊かであったことが伺える(写真6参照)。



写真 6. 伊藤左千夫の生家(山武市に所在)

敷地も広く、大きな母屋、茶室(唯真閣)が備わっている。なお、現在は山武市歴史民俗資料館が併置されている。こうした環境の中で育ったことから、左千夫の作品には、農村の人々、生活、風景などの描写に独特のものが感じられる。

また、『野菊の墓』の舞台となった場所にも、かつて訪れたことがあった。柴又の帝釈天の横を通り抜けると、江戸川の堤防に出る。矢切りの渡しで向う岸にわたるが、そこには河原でのゴルフ場がありプレーヤーの声が聞こえてくる。こちらの堤防を上がると、そこから見はるかすように田園風景が広がっており、ここが小説に描かれた場所なのかと感慨にふけたことがある。民子は嫁ぐ時、そして政夫は中学校の寮に入る時、いずれも矢切りの渡しを使ったことになるが、風情は当時と変わってはいなかった。

左千夫の小説には、『隣の嫁』、『春の潮』もあるが(伊藤左千夫(2006)参照)、いずれも封建的な慣例の残る、当時の農村での若者の恋を物語っている。現代の感覚からみれば理解できないところがあるかも知れない。しかし、こうした日本の原風景とも言える場面を取り上げた作品には、感慨深いものがあり、いつまでもひとびとに読み継がれるものと思う。

### 3-3-3. 武者小路実篤『友情』

武者小路実篤(1885年～1976年)は、父実世と母秋子(勘解由小路)の末の子として、子爵の家に生まれている。なお、武者小路家は、藤原公季を祖とする



三条家の分かれである。武者小路や勘解由小路の名称は、平安京の街路名から起こったとされる<sup>(27)</sup>。実篤は学習院高等部を経て、東京帝国大学文学部社会学科を中退している。

ここで取り上げた『友情』は、現代の日本文学における代表的な青春の文学といえよう。中学生や高校生の多くが読む作品であるが、一口でいえば、無二の親友の理解を得て、恋人との交際を進めようとしていた。しかし、彼女は親友の方に想いがあり、結局この二人は結ばれるという顛末である。小説の中では、プラトニックな思いが語られながら展開される。失恋という経験をとりえて、「友情とは何か?」、「愛とはなにか?」青年に自問させる作品といえる。武者小路の作品は、この他にも『愛と死』、『若き日の思い出』などがあり、青春時代に読まれることが多い。

ところで、武者小路は、親友である志賀直哉らと「白樺派」を立ち上げ、多くの同志を集めていた<sup>(28)</sup>。しかし、理想主義とか空想主義などといわれて、現実とどのように対応していくのか、無責任ではないかなどと批判する人々もいた。こうしたなかで、大正8年宮崎県児湯郡木城村石河内に「新しき村」を起こした<sup>(29)</sup>。これは、各自の生命が限りなく生かされ尊重されると同時に、調和ある美と愛の秩序が形成されるような世界、各自がただ働くだけでなく、働きながら真理を求め、美を想像しなければならない国、そのような理想国のモデルを作ろうとする運動であった。なお、「新しき村」は現在においても、地味ではあるが維持されている。

また、美術館を建てる計画があったが、関東大震災の影響もあり、立ち消えとなった。この計画中に所有していた「ロダン」の彫刻などは、後に倉敷にある大原美術館に移譲された。

武者小路は、大正2年地方政治家の妾腹の子、竹尾房子と披露もしないで結婚している。房子は学生時代から「青鞥」<sup>(30)</sup>のメンバーに加わっていたが、「白樺」にも興味を抱き、実篤との付き合いができたものである。武者小路実篤については、聖人君子のイメージがあったが、この結婚により、読者の中には失望した人もいたと思われる。なお、この房子が、実篤の親友志賀直哉の結婚に際して、勘解由小路家の康子をどうかと勧めていた。こうした縁で当事者の話がまとまり、大正3年志賀直哉と康子の結婚が成立した。康子には先夫の間に五歳の遺児がいたが、志賀との再婚後、この子を子どものいない武者小路家の養女にすることで約束が出来ていた。なお、大正11年、武者小路は、

この房子と離婚し、「新しき村」にいた飯河安子と再婚した。この後妻との間に3人の娘を授かっている。この三女である辰子が、エッセイ『父・実篤の周辺で』において、実篤のことを詳しく書いている。

なお、武者小路は、小説以外に絵を描くことを好み、身近にある野菜や果物の絵を多数残している。これらの多くは、親しみのあるほのかな雰囲気醸し出している作品である。家族によれば、実篤は不愉快なことがあった場合や、さびしい時、絵を描くことが多かった。絵を描くことにより、心の乱れやこだわりが消えていくように思われた。見つめ得るものしか描かず、稚拙とも無技巧とも言えるにしても、前田青嶺は「こんな正直な絵はない」とも表現している。内心からの表現としての絵であると受け止められていた<sup>(31)</sup>。

武者小路の終の棲家一帯は、現在実篤公園があり、隣接して実篤記念館がある。調布市の仙川駅から桐朋学園の横を通り抜けると、ほどなく記念館に行き当たる。同記念館には、実篤の作品についての品々が陳列されている。敷地は広大であり、庭園の一角に本人の胸像彫刻がある（写真7参照）。



写真7. 武者小路実篤の胸像

戦時中、武者小路は、「大東亜戦争私感」など、時局に応じた言説があったことから、戦後その活動がとがめられて、公職追放されていた。しかし、後に解除されて、これ

までの功績により1951年文化勲章を受章している。

### 3-4. 純粋な若者の生き方を伝える作品

#### 3-4-1. 夏目漱石『坊っちゃん』

本名夏目金之助は、1867年現在の新宿区喜久井町の名主夏目小兵衛直克と母千枝の五男として（五男三女の末っ子）生まれた。また、二歳のとき名主である塩原昌之助・やすの家へ養子に出されている。しかし、塩原夫妻の離縁により、七歳のとき夏目家に戻ってき

た。金之助は成績も良く、第一高等中学校を経て東京帝国大学文科大学に学び、英文学を専攻して特待生となった。卒業後、東京高等師範学校の講師や、松山にある愛媛県尋常中学校教諭（その後の松山中学）を経て、第五高等学校教授となった。正岡子規と親交があり、松山中学教師時代同じ家の一階と二階に住んでいたことがある（この家を愚陀佛庵と称した）。1896年貴族院書記官長中根重一の長女鏡子と結婚している。1900年に文部省派遣留学生に選ばれて、二年間英国に留学した。留学中から神経症に悩まされたが、友人の高浜虚子の勧めで、『吾輩は猫である』を「ホトトギス」に掲載し、一躍文名が上がることになった。1907年に一切の教職を辞して東京朝日新聞に入社し、小説記者となっている。

本稿で取り上げた『坊っちゃん』は、少年少女時代に読まれることが多く、青春小説の代表作とも言える。学校を卒業して松山の中等学校に赴任した江戸っ子の教師「坊っちゃん」は、一本気で田舎の習慣や風俗に馴染めず、教師生活にも気持ちが乗らない日々が続いていた。教頭「赤シャツ」とこれに取り入る画学教師「野だいこ」の二人の生きざまが気に食わない「坊っちゃん」は、同じ考えの「山嵐」と組んで、彼らをやっつけた後、辞表を提出して郷里に帰るといふ、一見すれば「勧善懲悪」の物語である。また、日本の悪童物語の典型とする人もいる<sup>(32)</sup>。子ども時代に読んでも話の内容は、分かりやすく記憶に残ったものである。しかし、その後、読み返してみると、やっつけた本人たちが勝ったのではなく、そのため学校を退職することになるのは、負けたとも考えられる。また、自分の帰るところがある「坊っちゃん」について、基本的に豊かで大事にされてきた若者が、主人公であったことを認識しておかねばならない。とかく社会には、上司にこびへつらう部下職員や、上司が特別に可愛がる部下がいるなどのケースはめずらしくはない。気に食わない若者が、武力で気持ちを納めようとするのは、幼稚であり、世間では受け入れられるものではない。もちろん、悪事を暴くことは、全く別の問題である。

このように、比較的単純な物語ではあるが、これについて、一字一句きめ細かく研究していく読み方も披露されている<sup>(33)</sup>。たとえば、この書では、四十島がターナー島と呼ばれる由来についてとか、マドンナのモデルは誰かなどを追及している。また、「坊っちゃん」の出自は、どのような家系なのか多田源氏の系図を調べている。さらに、「宮崎県は、猿と人間が半分ずつ住んでいるようなところ」などと、小説の中で馬鹿に

しているが、宮崎の人々はどのように思っているのかなど、楽しいテーマがある。筆者も、当初、物理学校とはどのような学校か興味があったが、現在の東京理科大学の前身であり、市ヶ谷の法政大学の対面にある学舎をみると、いつも『坊っちゃん』のことを思い出すようになった。

なお、このほか漱石の青春小説には、『三四郎』がある。初めて読んだ時、『坊っちゃん』に比べてスローテンポで話が進み、プラトニックな恋物語として顛末を迎えるが、読後の感銘の度は薄いものであった。それは、一口で述べれば、まだ若かったためと思われる。主人公の三四郎は、熊本の旧制五高から、東京帝国大学に入学する。当時の東京に、田舎から出てきた学生として目まぐるしく過ごす中で、一人の女性（美禰子）との出会いから、その人に魅力を覚えることになる。結局は、思い届かず、この女性は彼女の兄の友人のもとへ嫁ぐことになる。『三四郎』を初めて読んだ時、退屈な小説だと思ったが、後になって、当時の時代を映した素晴らしい作品と思うようになった。青春期の甘酸っぱい思いを伝える作品でもある。この中で、広田先生のことが面白く述べられている。この先生は、旧制一高のドイツ語および哲学教授岩元禎がモデルとされる。『三四郎』を読んで、改めて高橋英夫（1984）を読み、いわゆる「偉大なる暗闇」の存在を知った。また、旧制三高においても同じような名物教授として土井虎賀寿をモデルとした青山光二（1987）も、すぐれた作品と思う。「文士たるべき天分がなく、大学教授たる勉強が足りないし、教育者たるべくは品行が悪い」といわれながらも、不思議な魅力たっぷりの名物教授が、若者の魂に刺激を与えていたことになる<sup>(34)</sup>。なお、三四郎池は、元の加賀前田藩主により、育徳園心学池として築造されたものであるが、漱石の小説の主人公がこの池の周りを徘徊する場面から、いつの間にか三四郎池と親しまれるようになったことは有名である（写真8参照）。

ところで、漱石自身について、秀才であったことは別にして、難しい人、神経質の人、病弱な人などと多くの書物で触れられているが、1916年、胃潰瘍を悪化させて、50歳で永眠した。家庭での漱石については、偶々、夏目鏡子の『漱石の思い出』を読んだが、鏡子の目から見た夫のこと、友人のことが淡々と語られており、なるほどと思った次第である。その結果、漱石に対するイメージが変わったように思う。この本を、もう少し早い時期に読んでおけば良かったと考えている。





写真 8. 三四郎池

また、漱石没後 100 年ということで、いくつかの作品が出ているが、最近、出版された十川信介 (2016) は、漱石を知る格好の書である。このほか、漱石の作品は高尚ではあるが難解なものが多いため、とかく後回しにされる場合がある。しかし、漱石の孫夏目房之介が書いた『孫が読む漱石』は、気楽に漱石にアプローチしており、取りつきやすい書となっている。

### 3-4-2. 山本周五郎『ちいさこべ』

山本周五郎 (1903 年～ 1967 年) は、父清水逸太郎、母とくとの長男として山梨県大月市に生まれる。本名は三十六 (さとむ) であった。馬喰、繭の仲買、諸小売などが生業であったが、父の仕事の都合で家族は上京した。しかし、生活は苦しく三十六は、尋常小学校を卒業と同時に、質店の山本周五郎商店に徒弟として住みこんだ。店主は、三十六を可愛がり、小説を書くに際し、物心両面の援助を行っている。このことから、ペンネームを山本周五郎とした。関東大震災によりこの質屋は焼失したため、友人の紹介で神戸の花隈にある観光ガイド誌の編集記者となった。さらに東京に戻り、帝国興信所を母体とする雑誌「日本魂」の編集記者として就職している。記者として同誌に記事を書いていたが、このころ文芸春秋に『須磨寺付近』を発表し文壇に登場することになった。現在、これを記念して、須磨寺に山本周五郎記念碑がある (写真 9 参照)。

須磨寺には、平敦盛が最期まで身につけていた「青葉の笛」が、寺宝として伝えられており、境内には敦盛の首塚もある。この場所を訪れた際、戦前唱歌として歌われた「青葉の笛」の曲が流れており、懐かしく思い出された。

しかし、周五郎は勤務態度に問題があるとして、昭和 3 年 10 月の人事異動で、解職されることになった。その後、昭和 5 年に宮城県亘理郡吉田村出身の土生き



写真 9. 山本周五郎の記念碑 (於須磨寺)

よいと結婚した。同 6 年に文学仲間が多数住んでいる馬込界隈に居を移している。この頃の仲間には、たとえば、尾崎士郎、室生犀星、村岡花子、藤浦洸、保高德蔵などがいた。

山本周五郎について、尾崎士郎は「曲軒」の人と評するほどつむじ曲がりのところがあり、怒るのも早い、笑うことも早い。また、たやすく人を容れない狭量さを指摘している。周五郎は、ある年の直木賞を辞退したが、文学賞選考委員の面々に不満があったとの理由や、天皇や総理大臣の主催する園遊会に出席するのは御免だという思いがあった。本人は、「社会の底辺で真面目に生きようとする多くの読者のために、よりよい作品を提供することのみが願いである」と常に言っていたとのことである<sup>(35)</sup>。

ところで、本稿で取り上げた作品『ちいさこべ』は、5 世紀後半、雄略天皇の侍臣の小子部「ちいさこべ」が、天皇のおっしゃったことを聞きちがえて、蚕の代わりに子どもを献上したことから、宮殿近くで、その子どもたちを育てることになった故事からとったものである<sup>(36)</sup>。大工棟梁「茂次」は、江戸の火災で両親を失い、家の再興に腐心していた。同様な運命にあった「おりつ」が、家事を司る使用人として、この家にやってきた。そのころ江戸の町では、しばしば火災が発生し、大きな被害を出していたが、この火事で親を亡くした浮浪児を、棟梁の家で面倒を見ざるを得なくなっていた。「おりつ」は、多数の職人や孤児たちの食事、掃除やその他の雑事をこなしていたことになる。

この「おりつ」が、最近、子どもの中で大柄なひとりが、自分の振る舞いを、じっと見つめていることに気がついた。このことから、歳頃になった男の子が、異性に関心を持つようになったのかと思われた。何所か丁稚の口を探して、この家から出すことも考えねばならなかった。しかし、ある日のこと、夜半にこの子

どもが自分の部屋のふすまをそっと開けて、「お母さん 御休み」と挨拶して、寝室に向かう姿に気がついた。この子は、「おりつ」を母親と同じ思いで見つめていたのだった。

また、その頃、この棟梁は親しい質屋から、材料費などの借入れをしていた。偶々、その質屋の娘は器量よしで教育もあることから、将来この娘が棟梁の嫁になるのではないかと噂があった。子どものことを、誤った見方をしていたことや、質屋の娘のこともあり、「おりつ」は、そろそろ自分の退き時を考えていた。ある日、棟梁にこの話を伝えたが、棟梁は「おりつ」に自分の嫁になって、家の面倒を見てくれという。

この短編のなかに、いろいろと伏線があり、読者をハラハラさせるが、すべてがうまく納まりホッとさせることになる。周五郎の作品には、このように、苦難に遭遇するも、真摯に努めることから思いがけない救いがあるというものが多い。

たとえば、『柳橋物語』も、多くの若者に読まれている作品であるが、主人公がどん底の中から生きる希望を見出すという物語である。このように、多くの作品が、様々な人間の生き方について、常に善意の立場に立って考察が加えられ、八方ふさがりの中からも、希望や生きる喜びを模索し、実現させるところがあり、読者は、山本周五郎の世界に引きずり込まれることになる。

### 3-4-3. 井上靖『あすなろ物語』

井上靖（1907～1991年）は軍医の父井上隼雄と母やえの長男として生まれる。父の転勤により、母は手の離せない弟、妹を連れて同行したため、靖は、祖母のもとで伊豆の山村に暮らした。この祖母は、母方の曾祖父（この曾祖父も医者で、その当時の大御所松本順<sup>(37)</sup>の弟子であった）の妾であったが、曾祖父は自分の孫である母を分家させて、その戸籍に自分の愛人を養母として入れていたことになる。その見返りとして、医者を開業していた家と、本家の屋敷と土蔵を、母に与えていた。なお、家と屋敷および診察室は、当時他の医師に貸していたため、祖母と靖は、土蔵で生活していた。

この時代のことは、『あすなろ物語』にも詳述されているが、井上靖には自伝的小説として、『あすなろ物語』のほか『しろばんば』、『夏草冬涛』、『北の海』があり、エッセイの形でも『幼き日のこと』、『青春放浪』、『私の自己形成史』がある（井上靖（2014）参照）。少年時代から中学校時代、さらに高等学校生活から大学への進学、また社会人としての生活などを段階的に

活写しており、いずれも青春時代の読み物として印象に残るものである。

本稿で取り上げた『あすなろ物語』は、明日は檜になろうと思いつきながら、永遠に檜になれないという悲しい話をもとにして、努力をしても思うようにならない人生を、自分に置き換えて小説にしているところがあり、人々の共感を誘うことになる。自伝小説の中で、中学時代の生活や友人との交友を描いた『夏草冬涛』も、読者は自分との共通点や、思い出の中に引き込まれることになる。さらに、『北の海』の柔道に明け暮れる高校生活での、ひたむきな姿にも感心する。勝つためには、練習に励むのは当然として、体力に劣るところをカバーするには、最初から寝技に持ち込むことが必要となる。旧六高や旧四高がインターハイで好成績を残したのは、この戦法があったとされている。このことは、現代の国立七大学戦（旧七帝戦）における柔道にも影響を与えている。なお、井上靖は、この当時猛練習に明け暮れていたが、練習時間などの規則を改めることを提案したところ、先輩から顰蹙（ヒンシュク）をかうことになり、それがもとで、退部することになった。同期の仲間も追従し、三年生の部員は誰もいなくなってしまった。柔道の練習がなくなり、時間が出来たことから詩作を始めている。

ところで、戦争中の作家は、従軍記録を書くなどの任務はあっても、兵として戦争の真ただ中に加わる者は少なかった。しかし、井上靖は日華事変で徴兵されて、北支に渡っている。この時の『中国行軍日記』が、三島にある井上靖文学館から出版された。このなかで、歌のうまい兵隊仲間の一人が、上原敏が歌ってヒットした「流転」を聞かせてくれたことがあった。この原作は自分が書いたものだといっても、兵隊の誰もが信じてくれなかったことを、娘の黒田佳子書いている<sup>(38)</sup>。なお、戦地へ慰問に行く芸能人は兵役を免除されていたが、この歌手上原敏は徴兵されて、南方戦地に赴き、昭和19年ニューギニアで戦死している<sup>(39)</sup>。

クレマチスの丘にある井上靖文学館入口近くに「あすなろ」の木が植えられている（写真10参照）。『あすなろ物語』の「あすなろ」の木かと思うと感慨深いものがあつた。

なお、自伝小説の読後、井上靖を振り返る時、秀才ではあったが、こつこつと勉学に努める優等生ではなかったといえる。能力はあっても、中学受験や高校受験にそれぞれ失敗を経験している。大学も九州帝国大学を退学して、京都帝国大学に入り直すなど、ずいぶん遠回りをしている。自分のやりたいこと、学びたい





写真 10. あすなろの木（於井上靖文学館）

ことに妥協しないで、何処までも追及する姿勢に、読者は、共感と尊敬の念を抱くことになる。井上靖は29歳で大学を卒業したが、前年に京都帝国大学名誉教授の足立文太郎の長女ふみと結婚した。サンデー毎日の懸賞募集に応じて、『流転』が入選した縁で、サンデー毎日編集部勤務が決まった。また、『闘牛』を発表して、昭和25年芥川賞を受賞して以降、作家活動に専念するようになった。

### 3-5. 子ども達の成長と戦争の悲劇を伝える物語

#### 3-5-1. 壺井栄『二十四の瞳』

栄は（1900年～1967年）、この小説の舞台となった小豆島の生まれである。父岩井藤吉、母アサの五女であるが、兄弟姉妹10人と孤児を引き取るなど大家族であった。稼業は樽職であったが、取引先の醤油醸造元が倒産し、その影響で後に自家も倒産している。栄は内海高等小学校を卒業したのち、島の郵便局に勤めていた。この頃、母アサが半身不随の病に倒れ、長兄も死亡するなど不幸が重なっている。

1925年に詩人の壺井繁治を知り結婚した。夫は当時、無政府主義者ではないかとみられており、それがもとで警察に逮捕されることもあった。また、「アカ」だとして、夫は勤務先を解雇されることもあったが、それがもとで栄自身の分筆業にも夫の影響が及んだ。このため、その当時は、少女小説や創作童話に取り組んでいる。

戦後になって、のびのびと思うことを書くことができる時代になり、『二十四の瞳』は、その代表作となった。

小説では、師範学校を卒業した大石先生が、岬の分教場（苗羽尋常小学校田浦分校）に赴任してきた。1年生12人（男子5人、女子7人）の担任となり、熱心な教育が評価されて、みんなから慕われるように

なった。二学期になり、嵐の後の浜辺に生徒を連れて行ったが、イタズラで掘られた落とし穴に足を取られて、先生はアキレス腱を切ってしまう。長期の休暇となったが、子どもたちは待ちきれずに、ある日8キロも離れている先生の家を目指して歩き始める。1年生の子どもには厳しいものがあり、泣き出す子もいたが、ちょうど通院先から帰ってきた先生が、バスの中から子どもたちを発見することになる。映画では高峰秀子が演じる大石先生と生徒達の劇的な遭遇となり、観客を泣かせる場面となった。

足が悪く岬にある分教場には通えないので、先生は本校勤務となるが、月日が流れて上級生となった生徒たちを、また本校で担任することになる。こうした子どもたちは、やがてそれぞれの道へと巣立っていくが、各人の人生は、戦争により翻弄されることになる。男子生徒だった3人は、成人して戦死し、一人は戦場で失明して帰ってきた。女子は、一人は死亡、一人は行方不明となったが、師範学校を卒業して、母校の教師になった教え子もいた。映画での同窓会の場面で、眼の見えなくなった教え子が、当時の写真を思い出し、誰がここにいると指さす様子が涙を誘うことになる。こうした場面を通じて、戦争の悲惨さを訴えている作品といえる。読みなおして改めて痛感した次第である。

戦時中は、治安維持法<sup>(40)</sup>により、「アカ」や体制批判をする人々が次々に逮捕される時代があった。壺井栄の夫もその範疇にあり、苦勞したことを考えると、戦争反対を文章のうえだけでなく、自らも体を張って唱えてきた様子が伺える。このことから、『二十四の瞳』が、いつまでも人々に読まれている理由が分かるような気がする。

なお、栄の児童文学として読まれている『母のない子と子のない母と』においても、小豆島の風土と人々の生活を活写している。併せて、作品では戦争の悲惨なことを伝えており、「戦争は人々に不幸しかもたらさない」という想いが、ひしひしと伝わってくる。これは『二十四の瞳』の主張と同じである。

学生時代以来、久しぶりに小豆島を訪れたが、岬の分教場（苗羽尋常小学校田浦分校）の跡地は、現在も管理されており、壺井栄文学館が「二十四の瞳映画村」内に設けられていた（写真11参照）。

以前から小豆島は、醤油の産地として有名であり、現在にも受け継がれているが、最近では、気候風土を生かしたオリーブの栽培と関連製品の生産が進められている。「二十四の瞳映画村」前から、このオリーブ公園前まで、渡し船が運航していた。





写真 11. 壺井栄文学記念館入口にある写真

#### 4 作品についての考察

上記の作品を振り返ってみると、第1分類の『たけくらべ』と『伊豆の踊子』は、少年（または学生）と少女の異性への淡い想いやあこがれを伝える物語であり、現在でも多くの若者に読み継がれている。前著の主人公である「みどり」は、廓に住む少女である。当時の古い「家」の概念から考察すると、この少女も成人してこの「廓」で生活するのではないかと、読者は想像するであろう。一方、後者は、当時の旅役者とは、如何なる人たちであるかということを、宿の女将の言葉などを通じて、あっさりと言及している。作品では、若者の純粋な美しい部分だけを抽出して、語っていることになる。

第2分類の『潮騒』は、世の中のしがらみや、苦難を乗り越えて、若者二人が結ばれるという作品である。ひたむきな努力の結果が、幸福につながるという物語が、若い読者に、希望と勇気を与えることになる。三島の作品には難解なものがあるが、この作品は理解しやすくファンも多い。

一方、第3分類の『舞姫』、『野菊の墓』と『友情』は、いずれも恋が実らず、読者を悲嘆させるが、そのことが人々の心に、いつまでも残る作品となっている。恋が実らなかった理由は、まちまちであるが、答えは読者ひとりひとりの心のうちにあるように思う。

『舞姫』は、留学生と現地の女性との恋物語である。小説の結末は、悲惨なものとなっている。一方、この恋物語が、実際の作者と恋人との間で、繰り広げられた思いもよらない展開との関係において、多くの人々の関心を引き付けたことになる。現在でも、この件についての研究や調査の結果が、次々に発表されている。

一方、『野菊の墓』は、封建的な時代における農村

の若者たちの恋物語である。死に至るまで、愛し続けた女性の姿に、涙を流す読者は多い。しかし、この小説のファンは多いが、世の中のしがらみの多い時代の恋愛について、現在の若者には、理解されるであろうか？

また、『友情』は、恋人との関係を取り持つために、親友の助けを借りていたが、いつの間にか、この親友と恋人とが、親しくなり二人は海外に旅立ってしまう物語である。現実には、ありうる話といえるが、親友と恋人を同時に失った若者は、どのように立ち直るのか、読者に考えさせていることになる。

第4分類の純粋な若者の生き方を伝える作品として、『坊っちゃん』、『ちいさこべ』と『あすなる物語』がある。いずれも若者が読書の対象として早くから取り上げる作品である。

『坊っちゃん』は、江戸っ子を自認する若者が、地方都市の中学教師に赴任するが、土地の風習になじめない生活を送っている。学校を仕切っている教頭と、これに取り入る教師を許すことができず、賛意を示す同僚とともに、この二人をやっつけるという物語である。この後、二人は学校を退職して郷里に帰ることになるが、これは「やっつけた」ことになるのだろうか？

読者は、主人公について、好き嫌い、善い悪い、純粋か単純かなどの視点から、それぞれの答えを持つことになる。

『ちいさこべ』は、火災の結果、親を無くした子どもたちを、同様な経験をした大工棟梁が、家で面倒を見させていた。日頃の生活の中で、子どもたちの成長の姿を捉えている。たまたま、一人の子どもの行動が、誤解を招くことになるが、やがて真実が分かり読者を安堵させる。また、使用人の女性のひたむきさに惚れ込んだ棟梁が、自分の嫁にしたいと伝えるところが、人々の心を打つ。この作品は、恋物語として捉えることもできる。ひたむきに勤める姿が、やがていいことにつながるという、周五郎独特の物語でもある。

『あすなる物語』は、少年が成長していく過程を物語る自伝的青春小説といえる。成長しようと努力するも、なかなか思うようにならない人生をタイトルで暗示しているが、多くの読者の共感を得ることになる。井上靖には、成長過程に応じて、自伝的青春物語がいくつもあるが、いずれも高い評価を得ている。

第5分類では、『二十四の瞳』がある。子どものたくましく生きていく姿を捉えながら、作者の訴えが読者に響く作品である。教師の目から見た、教え子の成長過程と、その後子どもたちが戦争に翻弄される姿を

伝えている。一言でいえば、戦争反対を訴える児童文学である。

なお、筆者の学歴を整理すると、歳の順から森鷗外、夏目漱石、武者小路実篤、川端康成、三島由紀夫となり、東京帝国大学の卒業（武者小路は中退）である。当時の就学事情からみると、とびぬけたエリートといえる。彼らの家はそれぞれ、医師、元庄屋、華族、医師、高級官僚であり、当時としては恵まれていたことが分かる。

ただし、川端は幼少の頃、両親を失っており、このことが生涯にわたり、人間形成に影響を与えたと本人も自覚していた。三島も、両親が居るにもかかわらず、祖母の近くで育てられ、文学に馴染むも、子どもたちと戯れるようなことはなかった。このことは、成長後の本人の意識に影響を与えていたと推察される。川端は、睡眠薬の多用により死に至ったが、三島は「楯の会」を組織し、市ヶ谷の自衛隊駐屯地においてアジ演説を行い、自衛隊員の決起を訴えたが、無視された結果切腹自殺した。このような行動について、幼少期の育ち方が影響したとする見方がある。

森鷗外と武者小路実篤は、最初の結婚に失敗しており、その後再婚している。鷗外は、医学博士、文学博士を取得しており、陸軍の軍医総監にまでなったが、家庭的には恵まれなかったとする研究家の指摘がある。また、実篤は、青春物語をいくつか書いており、多くのファンがいるが、立ち上げた「新しき村」は、現在では知る人も少なくなっている。なお、再婚後に子宝に恵まれた二人は、それぞれの娘が、良き親のことについて記したエッセイを残している（上述）。

夏目漱石は、留学により欧州の文化を吸収して、日本に持ち込んだ功績は大きいといえる。ただ、留学中は神経症に悩み、晩年は胃病に苦しんだ。漱石には名譽欲がなく、文学博士の称号授与を断っている。この辺りが鷗外と異なるところである。漱石の作品には難解なものもあるが、インテリに限らず現在も多くの愛読者がいる。

学歴エリートとは対照的なのは、樋口一葉、壺井栄、山本周五郎であり、いずれも尋常小学校または尋常高等小学校卒である。家庭が貧しく、上級学校への進学希望があったにもかかわらず断念している。それぞれの家の職業は、下級官吏、樽職、馬喰・繭の仲買であった。各人の著書からいえることは、三人とも真面目で、信念を貫くところが、誰からも愛されるところであろう。

このほか、伊藤左千夫と井上靖がいる。伊藤左千夫は、裕福な農家の出であり、井上靖は軍医の家に生ま

れている。いずれも経済的環境については、恵まれていたといえる。なお、井上は、徴兵により兵役を経験した作家である（鷗外は自ら軍医として軍務についていた）。

## 5 むすびにかえて

本稿では、日本の著名な作家の懐かしい青春物語を事例にして、初めて読んだ頃の印象や感想を辿り、歳月を経た今日、どのように解釈することができるのか再考を試みた。

青少年時代の読書について思い直すと、その動機はまちまちであった。「文豪の作品を読んでおかないと、将来恥をかく」と薦められたものもあれば、読書家の友人が読んでいた本を垣間見て刺激を受けたこともあった。受験勉強の過程で、「この程度の本を読んでもおかないと、試験に失敗する」などと、教師から皮肉られたことも引き金になっていた。この他にも映画館の看板広告から原作を読みたいと思ったこともあった。どちらか言うと、向学心に燃えて読書に励んだという記憶は、残念ながらあまりなかったことになる。

一方、大人になってからの読書では、電車の中で気軽に読める作品を手にしていたことが多い。その時々「ベストセラー」や「ハウツーもの」と呼ばれる作品にも手を出していた。何かを究めようとする読書態度ではなく、その時々で、作品を探していたことになる。

明確な目的があって、これに資する読書は、学術研究のためや資料収集という分野のものである。趣味や楽しむために読むのとは、また別のものといえる。本稿で取り上げた作品の読書は、どちらかといえば、後者の範疇にある読書かも知れない。

しかしながら、青春物語の類を読んでいた頃は、主人公の生き方に共感を覚えたこともあった。また、淡い恋を語る作品に感動したものである。主人公たちが、苦難の末に恋愛が成就する物語には安堵したが、一方、失恋に至る物語の推移に、心痛めたこともある。また、戦争に翻弄されながら、たくましく生きていく若者の姿を描く作品には、胸を打たれるものがあった。

このように本稿で取り上げた作品は、若い時代に、明確な目的があって読んだ作品ではなかったが、筆者にとって、今となっては懐かしく思い出されるものばかりである。現在においても、読んだ頃の感動や思い出は忘れることはない。ただし、若かったために、も

のの道理も充分に分かっていない頃の読書であり、経年とともに作品に関する新たな発見にも気づくことがあった。

換言すれば、その後の社会人としての日常生活や仕事上の業務経験などの結果、これらの作品との関わりにおいて、改めて理解できたことや新しい発見に出会うことも一度や二度ではなかったように思う。つまり、読書を続けていたことから、人生における様々な出来事と作者や作品との思いがけない結びつきに気が付くことがあったといえる。このことは、読書活動の賜物であり、また、人は「本を読む」ことから多くを学び、心を育むことができることを示している。活字離れといわれる今日、本稿が読書に励む若者に、何らかのヒントを与える契機となれば幸いである。

## 謝辞

山下博之（郷土史研究家）、野畑康（元ダイヘン環境管理部長）、小石正夫（元大阪厚生信用金庫常務理事）、栗本征彦（友人）、浅葉正美（元大和銀行システム部部長代理）各位から貴重な意見をいただいた。

また、長岡智寿子（国立教育政策研究所フェロー）、長岡健壽（サントリー食品インターナショナル（株）品質保証・技術部 部長）および妻宣子からもコメントを得た。記して謝す。

## 注

- (1) 法真寺配布資料によれば、信如のモデルと「桜木の宿」についてのいわれが記されている。また、法真寺の情景を『ゆく雲』のなかでも記している。なお、法真寺の住所は、東京都文京区本郷 5-27-11 であり、東京大学の赤門前にある。
- (2) 半井桃水(1861-1926)小説家。東京朝日新聞記者。父の仕事の関係で、少年期、朝鮮・釜山で過ごした経験から、朝鮮語ができた。このため、釜山駐在を7年間経験している。一葉は、友人の紹介により、小説の指導を受けるべく半井の門下に入ったが、人の中傷などがあり、指導を受けることを辞退している。なお、このことについて、佐伯順子編(2004)pp.82-126を参照されたい。
- (3) 佐伯順子編(2004)pp.82-126参照。半井桃水との師弟関係とその解消について、その前後の周囲の噂や世の中の様子について、詳しく書いている。
- (4) 大杉栄(1885-1923)思想家、社会運動家。1923年に大杉栄と伊藤野枝および甥の三人は、憲兵隊に逮捕され、虐殺された。いわゆる甘粕事件である。

隊長であった甘粕憲兵大尉は、事件の責任者として10年の刑を受けて、服役していたが、摂政の宮のご成婚による恩赦により、減刑・釈放されている。その後、関東軍の要請で満州に渡り、諜報活動などに従事している。表向きは満州映画協会の理事長として、五族協和の理念の下、映画製作を推進していたが、裏では満洲事変などを画策していた。「すばる」(2016)2, pp.269-272 参照。

- (5) 「すばる」(2016)2, pp.250-259 参照。
- (6) 西田勝「ファシストと文学」「すばる」(2016)2pp.263-272 参照。
- (7) 旅芸人に対する、宿屋の人たちの軽蔑の言葉が、随所で語られている。たとえば、「あんな者、・・・今夜の宿のあてなんぞございますものか」とか、村の入口に「物乞い旅芸人村にはいるべからず」という立て札があったなどが記されている。そのほか、「下田の港は、芸人や香具師のような連中の、渡り鳥の巣であるらしい」という表現もある。川端康成(2015)p.202, 227, 228 参照。
- (8) 作者はこのことを書くか、書くまいか悩んでいるが、「踊り子の兄夫婦は、悪い病の腫物に悩んでいた。水のような透き通った子が産まれたのも、この病のためであったろう。」と別の書にて明らかにしている。(川端康成(2015)の「伊豆の思い出」その二参照。同「伊豆の旅」pp.289-293 参照)。
- (9) 川端康成(2015)p.226の「伊豆の踊子」五参照。
- (10) 小谷野(2013)pp.101-134 参照。
- (11) 笹川隆平(1991)pp.157-171 参照。
- (12) 2016.4.27 日本経済新聞文化欄記事 水原園博「川端康成悲しき初恋秘話」参照。
- (13) 佐藤誠三郎(1998)p.93 参照。
- (14) 工藤美代子(2010)p.14 参照。
- (15) 筆者が金融機関勤務時代に、大阪にあったモーターボート競走会の総会にオブザーバーとして出席した際、終了後昼食が出された。笹川会長の合図で、一堂に「鍋やきうどん」が出されたことに驚いた。食後、同氏の「フルーツ」との指示で、「夏みかん」が各人に一個配られた。皮をむく際に、皮汁が飛ぶと、ワイシャツの袖が汚れるので、慎重にむいたことを覚えている。笹川会長には、役所や金融機関の人が、気兼ねなく食べることができるように考えたとの発言があった。
- (16) 工藤美代子(2010)p.347-351 参照。東京にある笹川記念会館での食事は、きまってチャーハンであった。サントリーの佐治敬三氏が来られても、



チャーハンであったとのことである。食事について、質素であったことが分かる。

- (17) 佐藤誠三郎 (1998)pp.93-94 参照。ここで、笹川は、頼まれもしないのに、五十年間にわたって、川端家の墓参りを続けたと述べている。また、川端が日本ペンクラブ会長を引き受けて、資金集めに苦労している時、笹川は必要な資金を用立てたと記している。

工藤美代子 (2010)p.27 においても、笹川が川端家の墓守りをした話がでている。なお、笹川が健在の時は、大阪箕面市箕面と東京文京区林町小学校付近に私邸があった。しかし、現在はいずれもなくなり、他の建物が建っている。

- (18) 河野仁昭 (1995)pp.96-103 参照。昭和 32 年に、国際ペン東京大会が開かれて、会長として川端康成が、執行にあたった。成功裏に終始したが、最後は京都の野村別邸において、ガーデン・パーティが開かれ全日程を終えている。

- (19) 三島由紀夫 (2007) の佐伯彰一による解説の中に記している (pp.199-207)。

- (20) ここでは、皇子・貴族などの住む特定の寺の称のことを意味する。

- (21) ジェニフェール・ルシュール、鈴木雅生訳、三島由紀夫、祥伝社新書、2012 の p.249 参照。

- (22) 吉野俊彦 (1994) 参照。著者吉野俊彦は、東京大学法学部卒業後、日本銀行に入行。理事を経て、山一證券経済研究所理事長に就任、後に特別顧問。経済学博士。職をこなしながら、鷗外研究にも力を注ぎ、多数の鷗外に関する著作を発表してきた。本著は、『五人の女と二人の妻』というタイトルで、鷗外的女性遍歴を、緻密な資料収集から、その真実を探っている。興味深い作品となっている。

- (23) 鷗外の帰国と、エリーゼの来日にかかる時の流れは次の通り。

明治 21 年 9 月 8 日 鷗外帰国。

同年 9 月 12 日 (推定) エリーゼ来日、築地精養軒に泊。

同年 10 月 17 日 エリーゼ帰国。

明治 22 年 3 月 6 日 鷗外と赤松登志子結婚。

明治 23 年 1 月 鷗外舞姫発表。

同年 9 月 離婚。

明治 33 年 登志子再婚先で死亡 (肺結核による)。(吉野俊彦 (1994)pp.138-139. を参照のうえ作成)。

- (24) 高木兼寛は、海軍兵食の改良に努力した業績に対して、勲二等瑞宝章が下賜されている。高木は、

創立した成医学校を東京慈恵医院医学校と改称し、医院の付属としている。高木の、脚気についての主張に対して、帝国大学医科大学と陸軍軍医部門では、反対の立場をとった。森鷗外は、この反論の中心的な役割を担っていた (吉村昭 (1991) 下巻参照)。

- (25) 吉村昭 (1991) 参照。日清戦争では、戦死者よりも脚気により死亡した兵の方が三倍もいた。日露戦争でも、陸軍戦死者 47,000 人であり、脚気による死亡者は、27,800 人であった。これに対して海軍では、脚気患者はほとんど皆無であった。初代海軍軍医総監高木兼弘の不屈の信念と人類愛の証といえよう。森鷗外の陸軍との対決であったが、実証的に証明した海軍が、脚気の撲滅に成功したといえる。

- (26) 宇野浩二が『野菊の墓』(2006) の解説 (pp.199-228) のなかで、伊藤左千夫のことを書いている。左千夫の人物が明らかにされており、参考になる。

- (27) 阿川弘之 (1994) 上 p.191 参照。

- (28) 1910 年同人誌「白樺」を中心に起こった文芸思潮のひとつ。大正デモクラシーなど自由主義の空気を背景に、人間の生命を高らかにうたい、理想主義、人道主義、個人主義的な作品を発表した。志賀直哉、有島武郎、木下利玄、里見淳、柳宗悦、長与善郎のほか、画家では、梅原龍三郎、岸田劉生などが加わっていた。武者小路が思想的な面において中心人物であった。

- (29) 1918 年宮崎県児湯郡木城町に開村されている。1938 年にダム建設により、農地が水没するため、1939 年埼玉県毛呂山に、「東の村」に移転した。残りは日向新しき村として存続した。2013 年の村内生活者は 13 名、村外会員は約 160 人とされている。村の精神は、自他共生であり、自分だけ良ければいいという考えは許されないとしている。<https://ja.wikipedia.org/wiki/>などを参照。他にも「新しき村」について、ネット上で、検索可能である。

- (30) 青鞥社 (1911-1916) は、平塚雷鳥などが中心になり、当初は詩歌中心の女性文学集団であった。女性による月刊誌を発行し、婦人問題を世に印象付けた。しかし、その活動に対して、津田塾や日本女子大は、否定的に対応し、学生の参加を認めていなかった。後に、伊藤野枝が中心となり、婦人解放運動に力を入れるようになった。

- (31) 武者小路辰子 (2012)p.122-125 参照。

- (32) 吉本隆明 (2012)p.83 参照。
- (33) 五十嵐正明 (2007) 参照。ここでは、赤シャツのモデルや、自らの祖先の系図を辿るほか、マドンナは「済生学舎」出身の女医、久保祥子ではないかと、子孫から写真まで入手し、掲載している。四十島として、子規の歌もあるが、ターナー島またはマドンナ島などと呼ぶ由来も示している（同書 pp.58-83 参照）。面白いのは、宮崎に転勤させられる同僚のことを思って、宮崎などに行くことはないといっている。その理由が、宮崎は田舎で、猿と人間が半数ずつ住んでいるような田舎だと「坊っちゃん」は言っている。これについて、著者は宮崎の評判を調査している。
- (34) 青山光二 (1987) の解説を、高橋英夫が書いている。ここで、元旧制二高で教鞭をとった登張竹風が、友人の漢学者白河鯉洋の言葉として自分たちの仲間の批評を次のように紹介している。「お互いは文士たるべく天分が足りないし、大学教授たるべく勉強がたりないし、教育家たるべくは品行が悪い」と云い得て絶妙であると評している。
- (35) 木村久邇典 (1995) 参照。木村氏はジャーナリストであり、山本周五郎の熱烈なファンでもあった。周五郎から学んだことを、この書で伝えている。
- (36) 少年少女日本文学館 15 山本周五郎 (2009)p.51 参照。
- (37) 松本順 (旧名良順) (1832-1907) 幕末から明治期の医師 (御典医、軍医)。
- (38) 井上靖 (2016)p.7 において、娘の黒田佳子が、「流転」の話を伝えている。
- (39) 塩澤実信 (2012)p.181 参照。
- (40) 治安維持法は、国体の変革、私有財産制度の否認を目的とする結社運動・個人的行為に対する罰則を定めた法律。1925 年公布。1928 年改正。1941 年全面改正。1945 年廃止。主に、共産主義運動の抑圧策として、違反者には極刑主義を採り、言論・思想の自由を蹂躪した。
- 7) 井上靖・あすなろ物語・新潮文庫、1978.
- 8) 井上靖・幼き日のこと・青春放浪・新潮文庫、2014.
- 9) 井上靖・北の海・中央公論社、1975.
- 10) 井上靖・しろばんば・新潮文庫、2003.
- 11) 井上靖・中国行軍日記・井上靖文学館、2016.
- 12) 井上靖・夏草冬濤 上・下・新潮文庫、2013.
- 13) 井上靖・わが母の記・講談社文庫、2012.
- 14) 猪瀬直樹・ペルソナ 三島由紀夫伝・文芸春秋、1995.
- 15) 榎本義子・女の東と西 日英女性作家の比較研究・南雲堂、2003.
- 16) 川端康成・伊豆の旅・中公文庫、2015.
- 17) 木村久邇典・周五郎に生き方を学ぶ・実業之日本社、1995.
- 18) 工藤美代子・悪名の棺 笹川良一伝・幻冬舎、2010.
- 19) 小池弘三・須磨寺物語・四季社、2010.
- 20) 河野仁昭・川端康成一内なる京都・京都新聞社、1995.
- 21) 小谷野敦・川端康成伝 双面の人・中央公論新社、2013.
- 22) 佐伯順子・一葉語録・岩波書店、2004.
- 23) 笹川隆平・川端康成 大阪茨木時代と青春書簡集・和泉書院、1991.
- 24) 笹沢信・評伝 吉村昭・白水社、2014.
- 25) 佐藤誠三郎・笹川良一研究 異次元からの使者・中央公論社、1998.
- 26) ジェニフェール・ルシュール・鈴木雅生訳・三島由紀夫・祥伝社新書、2012.
- 27) 塩澤実信・昭和の戦時歌謡物語・展望社、2012.
- 28) 新潮日本文学アルバム・樋口一葉・新潮社、2004.
- 29) 高島俊男・漱石の夏やすみ・ちくま文庫、2007.
- 30) 高橋英夫・偉大なる暗闇 師 岩元禎と弟子たち・新潮社、1984.
- 31) 壺井栄・柿の木のある家・偕成社文庫、2014.
- 32) 壺井栄・二十四の瞳・新潮文庫、2009.
- 33) 壺井栄・母のない子と子のない母と、偕成社文庫、2008.
- 34) 十川信介・夏目漱石・岩波新書、2016.
- 35) ドナルド・キーン・徳岡孝夫訳・日本文学史 近代・現代篇・中央公論新社、2011.
- 36) 中村彰彦・三島事件 もう一人の主役・W A C、2015.
- 37) 長山靖生・鷗外のオカルト、漱石の科学・新潮社、

### 主なる参考文献

- 1) 青山光二・われらが風狂の師・新潮文庫、1987.
- 2) 阿川弘之・志賀直哉 上・下・岩波文庫、1994.
- 3) 甘粕正彦・樋口一葉の日記ほか (女性満州等記載)・すばる (2016) 2 月号 pp.250-273.
- 4) 五十嵐正明・『坊っちゃん』の秘密・新風舎、2007.
- 5) 伊藤左千夫・野菊の墓・新潮文庫、1998.
- 6) 伊藤左千夫・野菊の墓 他四篇 岩波文庫、2006.



1999.

- 38) 夏目鏡子述・松岡譲筆録・漱石の思い出・改造社、1928.
- 39) 夏目漱石・三四郎・新潮文庫、2007.
- 40) 夏目漱石・坊っちゃん・新潮文庫、2001.
- 41) 夏目房之介・孫が読む漱石・新潮文庫、2009.
- 42) 夏目房之介・漱石の孫、実業の日本社、2003.
- 43) 樋口一葉・にごりえ・たけくらべ・新潮文庫、1956.
- 44) 樋口一葉・ゆく雲・新潮文庫、1990.
- 45) 福田和也・山本周五郎で生きる喜びを知る・PHP新書、2016.
- 46) 北国新聞社編・金沢を描いた作家たち・北国新聞社、2011.
- 47) 三島由紀夫・仮面の告白・新潮文庫、1999.
- 48) 三島由紀夫・潮騒・新潮文庫、2007.
- 49) 三島由紀夫・春の雪・新潮社、1969.
- 50) 三島由紀夫・若きサムライのために・文春文庫、2004.
- 51) 武者小路実篤・愛と死・新潮文庫、1957.
- 52) 武者小路実篤・友情・岩波文庫、1986.
- 53) 武者小路実篤・若き日の思ひ出・新潮社、1957.
- 54) 武者小路辰子・父・実篤の周辺で・武者小路記念館運営事業団、2012.
- 55) 森鷗外・阿部一族・舞姫・新潮文庫、1999.
- 56) 森まゆみ・鷗外の坂・新潮社、1998.
- 57) 森茉莉・父の帽子・講談社文芸文庫、2014.
- 58) 山本周五郎・ちいさこべ・(少年少女日本文学館15版所蔵)・講談社、2009.
- 59) 山本周五郎・小説の効用・青べか物語・光文社、2009.
- 60) 山本周五郎・柳橋物語・むかしもいまも・新潮文庫、1981.
- 61) 吉野俊彦・あきらめの哲学・PHP、1978.
- 62) 吉野俊彦・鷗外・五人の女と二人の妻・ネスコ、1994.
- 63) 吉村昭・白い航跡 上・下・講談社、1991.
- 64) 吉本隆明・夏目漱石を読む・ちくま文庫、2012.
- 65) 六草いちか・鷗外の恋 舞姫エリスの真実・講談社、2014.
- 66) 六草いちか・それからのエリス いま明らかになる鷗外「舞姫」の面影・講談社、2015.

## その他の資料

- 1) 浄土宗 法眞寺 配布資料～樋口一葉ゆかりの寺～
- 2) 西田勝・ファシストと文学、「すばる」(2016) 2, pp.263-273.
- 3) 水原園博・川端康成 悲しき初恋物語・日本経済新聞社 朝刊文化欄、2016.4/27.